

児童・生徒が期待する教師の特性

小学生の場合

吉 田 道 雄

Teacher Traits Expected by Elementary School Pupils

Michio YOSHIDA

問 題

児童・生徒はどのような教師を望ましいと考えているのだろうか。また何を手がかりにして、望ましい教師だと判断しているのであろうか。教育の実践において効果をあげている教師がどのような行動をし、またどのような特性をもっているかについては、その授業行動の分析などによって多くの研究が行われてきた。ただしそのほとんどが、おとな(研究者や現職教師など)の行った評価を基礎にしている。ところで、教師は児童・生徒との相互作用の場の中で行動している。従って、児童・生徒の立場から、彼らがどのような教師を望ましいと考えているのかを検討してみることもまた重要だと思われる。もちろん、児童・生徒が望む教師が必ずしも教育的に優れた教師とは限らないが、しかし、児童・生徒が望むものからかけはなれた教師であれば、そのもっている能力を充分に発揮することができないことも、また明らかである。

以上の点をふまえ、本研究では児童・生徒が期待している教師の特性を、実験を通して検討してゆくことにする。具体的には一定の条件設定のもとで教人の人物写真を提示し、その中から望ましいと思う教師(実験では教育実習生)を選択させる。そして、その人物に対する評価を行わせ、さらに選択した理由を記述させる。なお、選択の手がかりとなる要因としては容貌や全体的印象が考えられるが、その全体的印象に影響をおよぼす可能性のあるものとして、人物写真の提示順や服装などがあげられた。このため実験には人物の提示順や服装も条件として組込まれている。

方 法

被験者 熊本大学教育学部附属小学校4年生, 計69名。

実験の実施場所 熊本大学教育学部附属教育工学センター(AVラボラトリー)。

実験の手続き 実験はすべてVTRを視聴することによって進められた。テープの内容を順をおって以下に示す。

1. インストラクター(女性)が画面に登場し実験への協力を依頼する。
2. 教育実習が実施されたことを確認し、実習生と楽しくすごせたかどうかをたずねる。さらに来年はどんな人が実習生としてやってくるのだろうかと問いかける。
3. つづけて3枚の人物写真を写すのでよく見るようにとの指示を与える。
4. 人物(教育学部2年生)写真を3枚連続して提示する。
5. 今見た3人は、来年被験者の学校へ実習生としてやってくることになっている人物だと説明する。さらに、3人のうちから自分達の担任になって欲しいと思う人物を選択するように指示

する。

6. 選択のためにもう一度3人の写真を提示する。

7. 人物の選択が終わった後で、質問紙への回答を指示する。

質問紙 テープによって提示された3人の人物から1人を選択したあとに、被験者は次の2種類の質問に回答するよう求められた。1つはその人物を選んだ理由を自由に記述することであり、他の1つは次のような10対の項目からなる尺度に、選択した人物を念頭において回答することである(5段階尺度)。

(1)あかるい—くらい、(2)あたたかい—つめたい、(3)やさしい—きびしい、(4)たよれる—たよりない、(5)近づきやすい—近づきにくい、(6)大きい—小さい、(7)おちついた—おちつきのない、(8)ていねい—あらい、(9)強い—弱い、(10)しずか—さわがしい。

提示順と服装 一般に印象形成の実験では刺激の提示順が問題になる(瀬谷, 1977a, 1977b)。一貫性のある結論がでているわけではないが、初めに見たかあるいは最後に見たかによって、人物の評価が影響を受ける可能性があることが指摘されている。また写真だけを見て望ましい人物を選択するような状況では、単に容貌だけではなく、人物が身につけている服装も大きな影響をもっているかもしれない。特に一般的に好きなタイプの人物を選ぶというのではなく、教師(本実験の場合には実習生ではあるが)として望ましいと思う人物を選ぶという状況である。そのような場合、教師らしい服装のイメージを児童・生徒は明確にもっているかもしれないのである。

以上のようないくつかの要因を実験に組込むために、3人の人物に3種類の服装(シャツにネクタイをつけたもの、ポロシャツ、白衣)をさせて、さらに提示順をランダムにしてテープを作成した。もちろん同一人物がいつも同じ服装では問題なので、服装についても1人が必ず3種類の服装をするように計画されている。その組合せを表1に示す。表からもわかるように、インスタクションはすべて同じであるが、要因の組合せの違いによって3種類のテープができあがることになる。

表1 実験計画(提示順, 人物, 服装の組合せ)

	提 示 順		
	1	2	3
実験ビデオ1	A (ネ)	B (白)	C (ポ)
2	B (ポ)	C (ネ)	A (白)
3	C (白)	A (ポ)	B (ネ)

※ A, B, C は人物

(ネ) はネクタイ, (白) は白衣, (ポ) はポロシャツの略

結 果

提示順 人物の選択と写真の提示順との関係を表2に示す。男子では、2番目に提示されたときに人物の選択数が少ないように思われるが、全体や女子の結果と同様に有意差は見出されなかった(いずれも χ^2 検定, $df=2$)。

服装 服装のちがいによる分析結果を表3に示す。全体の結果はそれほど特徴的な傾向を示していないが、性別に分けてみると有意差がみられる。男子ではネクタイをつけた人物が、女子では白衣の人物がより多く選択されている。

表2 提示順と選択度数

提示順	全体	男子	女子
1 番目	23	12	11
2 番目	17	5	12
3 番目	29	16	13
計	69 (3.130)	33 (5.636)	36 (0.167)

表4までの()は χ^2 値

表3 服装と選択度数

服装	全体	男子	女子
ネクタイ	26	18	8
白衣	29	9	20
ポロシャツ	14	6	8
計	69 (5.478)	33 (7.091)*	36 (8.000)*

* $p < .05$

選択された人物 服装や提示順を無視して、個々の人物がどの程度選択されているのかについて分析した結果が表4である。全体、男女別、いずれの場合にも人物Aが圧倒的に多く選択されている。

表4 人物と選択度数

人物	全体	男子	女子
A	45	19	26
B	18	11	7
C	6	3	3
計	69 (34.696)**	33 (11.636)**	36 (25.167)**

** $p < .01$

選択した人物に対する評価 次に10個の評定尺度に対する回答結果をみることにする。

1. 全体的結果 表5は選択した人物に対する回答の、全体および男女別の集計結果である。ここでは3人のうち誰が選択されたかは問題にしていない。 t の値は男女差を検定した結果である。これによると、女子に比べて男子は3つの項目で有意に高い評価を与えていることがわかる。すなわち男子は女子よりも自分達が選択した人物を、より近づきやすく、大きく、強いものとして認知しているのである。

2. 個々の人物に対する評価 全体の結果を人物毎に分け、それぞれに対する評価を分析した。具体的には各項目に対する人物毎の平均値の比較を行った(F 検定)。全体、男女別の分析結果

表5 S D 尺度に対する回答

	全体	男子	女子	t
あかるい —くらい	3.91 (1.07)	3.91 (1.11)	3.92 (1.04)	0.029
あたたかい —つめたい	4.04 (0.67)	4.03 (0.67)	4.06 (0.66)	0.154
やさしい —きびしい	3.87 (1.02)	3.76 (1.13)	3.97 (0.90)	0.865
たよれる —たよらない	3.30 (1.21)	3.55 (1.10)	3.08 (1.26)	1.594
近ずきやすい —近ずきにくい	3.94 (0.92)	4.27 (0.57)	3.64 (1.06)	3.019**
大きい —小さい	3.38 (1.21)	3.70 (1.06)	3.08 (1.26)	2.153*
おちついた —おちつきのない	3.57 (1.32)	3.58 (1.39)	3.56 (1.26)	0.062
ていねい —あらい	3.59 (1.12)	3.58 (1.10)	3.61 (1.14)	0.129
つよい —よわい	3.17 (1.18)	3.64 (1.04)	2.75 (1.14)	3.317**
しずか —さわがしい	3.28 (1.38)	3.09 (1.48)	3.44 (1.26)	1.055
N	69	33	36	

* $p < .05$, ** $p < .01$

表6 人物毎の S D 尺度に対する回答 (全体)

人物	A	B	C	F 値		
あかるい —くらい	4.02 (0.93)	3.78 (1.32)	3.50 (1.12)	0.804		
あたたかい —つめたい	4.04 (0.30)	4.11 (0.94)	3.83 (1.34)	0.375		
やさしい —きびしい	3.89 (0.85)	4.06 (1.22)	3.17 (1.21)	1.744		
たよれる —たよらない	3.49 (1.00)	2.89 (1.41)	3.17 (1.57)	1.636		
近ずきやすい —近ずきにくい	3.87 (0.83)	4.22 (0.92)	3.67 (1.25)	1.259		
大きい —小さい	3.42 (1.16)	3.28 (1.33)	3.33 (1.11)	0.093		
おちついた —おちつきのない	3.73 (1.14)	3.06 (1.58)	3.83 (1.34)	1.837		
ていねい —あらい	3.91 (0.84)	3.00 (1.29)	3.00 (1.41)	5.822	A × B	t = 3.250**
					A × C	t = 2.221*
つよい —よわい	3.18 (1.00)	3.22 (1.44)	3.00 (1.53)	0.077		
しずか —さわがしい	3.64 (1.12)	2.61 (1.57)	2.50 (1.50)	5.114	A × B	t = 2.885**
					A × C	t = 2.206*
N	45	18	6			

* $p < .05$, ** $p < .01$

を順に表6～表8に示す。全体の結果で有意な差がみられるのは、「ていねい—あらい」と「しずか—さわがしい」の2項目である。さらに詳しく人物間の差をみるためにt値を求めてみた。そ

表7 人物毎のSD尺度に対する回答(男子)

人物	A	B	C	F値	
あかるい -くらしい	4.26 (0.78)	3.27 (1.42)	4.00 (0.00)	3.039	
あたたかい -つめたい	4.05 (0.22)	3.82 (1.03)	4.67 (0.47)	1.946	
やさしい -きびしい	3.79 (0.95)	3.82 (1.40)	3.30 (0.94)	0.217	
たよれる -たよりない	3.63 (0.93)	3.09 (1.24)	4.67 (0.47)	2.729	
近ずきやすい -近ずきにくい	4.16 (0.59)	4.46 (0.50)	4.33 (0.47)	0.947	
大きい -小さい	3.79 (0.95)	3.73 (1.21)	3.00 (0.82)	0.692	
おちついた -おちつきのない	3.95 (1.10)	2.64 (1.49)	4.67 (0.47)	4.953	A × B t = 2.657*
ていねい -あらい	4.00 (0.56)	2.64 (1.30)	4.33 (0.47)	8.834	A × B t = 3.844**
つよい -よわい	3.47 (0.88)	3.73 (1.21)	4.33 (0.94)	0.916	
しずか -さわがしい	3.32 (1.26)	2.64 (1.67)	3.33 (1.70)	0.738	
N	19	11	3		

* p < .05, ** p < .01

表8 人物毎のSD尺度に対する回答(女子)

人物	A	B	C	F値	
あかるい -くらしい	3.85 (0.99)	4.57 (0.46)	3.00 (1.41)	2.817	
あたたかい -つめたい	4.04 (0.34)	4.57 (0.50)	3.00 (1.41)	8.058	A × B t = 3.223** A × C t = 2.956** B × C t = 2.319*
やさしい -きびしい	3.96 (0.76)	4.43 (0.73)	3.00 (1.41)	2.873	
たよれる -たよりない	3.39 (1.04)	2.57 (1.59)	1.67 (0.47)	3.622	
近ずきやすい -近ずきにくい	33.65 (0.92)	3.86 (1.25)	3.00 (1.41)	0.666	
大きい -小さい	3.15 (1.23)	2.57 (1.18)	3.67 (1.25)	0.916	
おちついた -おちつきのない	3.58 (1.15)	3.71 (1.49)	3.00 (1.41)	0.330	
ていねい -あらい	3.85 (0.99)	3.57 (1.05)	1.67 (0.47)	6.250	A × C t = 3.639** B × C t = 2.697*
つよい -よわい	2.96 (1.02)	2.43 (1.40)	1.67 (0.47)	2.158	
しずか -さわがしい	3.89 (0.93)	2.57 (1.40)	1.67 (0.47)	8.846	A × B t = 2.847** A × C t = 3.914**
N	26	7	3		

* p < .05, ** p < .01

の結果、いずれの場合にもAが他の2人よりもポジティブに評価されていることが確められた。男子の結果をみると、ここでもやはり2つの項目(「おちついた-おちつきのない」、「ていねい-あらい」)に有意差が認められる。人物毎にみると、いずれもAとBの間に有意差がある。Aの方がより「おちついた」、「ていねい」と評価されている。人物Cも比較的高い評価を受けているが、

人数が少ないこともあってはっきりとした結果は得られていない。女子では、「あたたかい一つめたい」、「ていねい—あらい」、「しずか—さわがしい」の3項目に有意差がみられる。「あたたかい一つめたい」ではBが最もポジティブな評価を受け、以下A、Cと続いている。「ていねい—あらい」ではAとC、BとCの間に有意差がみとめられる。「しずか—さわがしい」ではAとB、Cの間の差が有意である。どの場合にも、Cの評価が一貫して低い。

選択の理由 どうしてその人物を選んだのか、その理由を自由に記述させた。その結果をまとめたものが表9である。複数の理由をあげたものがあるために、回答数の合計は人数をこえている。上位には、「やさしそう」、「おもしろそう」、「顔がおもしろい」といった情緒的な項目がならんでいる。4番目に、「ちゃんと勉強を教えてくれそう」という勉学に関係のある項目があがっている。

表9 特定の人物を選択した理由

内 容	男子	女子	計
① やさしそう	13	22	35
② おもしろそう	10	12	22
③ 顔がおもしろい	6	5	11
④ ちゃんと勉強を教えてくれそう	4	4	8
⑤ 楽しそう	4	2	6
⑥ 遊んでくれそう	4	2	6
⑦ 頭がよさそう	3	1	4
⑧ スポーツがうまそう	3	0	3
⑨ 先生らしい	2	1	3
⑩ まじめそう	2	1	3
⑪ きびしそう	1	1	2
⑫ 顔がまとも	0	1	1
⑬ かっこいい	1	0	1
⑭ しっかりしていそう	0	1	1
⑮ 自分達のことを考えてくれそう	0	1	1
⑯ なかよくなれそう	0	1	1
⑰ はずかしがりやのようだ	0	1	1
⑱ せが高そう	1	0	1
⑲ 前の先生に似ている	1	0	1
N	55	56	111

考 察

提示順 印象形成に関する実験では、刺激の提示順が重要な要因として議論されることがある。本実験では刺激の提示順は本質的な要因ではないが、念のため提示順の効果についても考慮し、分析を行った。結果は表2に示されたように、本実験では提示順の与える影響は無視してもよいことが明らかにされた。

服装 服装については、男子はネクタイの人物を、女子は白衣の人物をそれぞれ選択しやすい

傾向がみられた(表3)。学校現場をみると、教師は必ずしも全員がネクタイをしているのでも、白衣を着ているのでもない。児童・生徒は教師がそのような服装をすることを期待しているのであろうか。実際にはそれほど単純なものではないだろう。本実験では教育実習生(実際には学部2年生)が刺激材料であり、もともと若くみえる人物ばかりである。従って、そういった人物がポロシャツを着ているのでは、とうてい先生というイメージがわかかなかったのではないだろうか。そこで、「ネクタイ」や「白衣」という、いってみればより教師らしい服装をしている人物を選ばうとしたとも考えられるのではなかろうか。もしそうだとすれば、小学生でもすでに教師らしい服装の人物とそうでない者とを識別しているともいえることになる。その意味では、教育実習生は自分が少なくとも最初の印象として教師らしい人物だと認知されるために、服装を重要な条件の一つとして考慮しなければならないということになる。男女差があることも興味をひく事実である。しかしながら、本実験で得られたデータのみからその理由までを明らかにすることは不可能である。さらに、中学生にもなれば、例えば理科の教師としては白衣の人物が、英語の教師としてはネクタイの人物がより選択されやすいったように、教科と教師らしいと認知することの間に意味のある関連がみいだされるかもしれない。

選択された人物 全体、男女別、いずれの場合にも特定の人物が圧倒的に多く選択された(表4の人物A)。この結果からは、児童は顔を中心とした容貌から受けるイメージによって、教師として望ましいと思う人物とそうでない人物とを識別しているといえる。容貌のみで教師の良し悪しを決定することなどむしろ大変な暴論であるが、少なくとも望ましい印象を与えやすい人物とそうでない人物とを、児童・生徒が区別する可能性があることは事実として認めるべきであろう。そのような認識をもったうえで、無条件には、あるいは容貌といった第一印象では、望ましい教師として認知されにくいタイプの人物が、どのような態度・行動をとってゆけば児童・生徒から期待され、あるいは高く評価されるようになるのかを検討してゆくことが重要ではないだろうか。このようなことは現職教師の場合には、児童・生徒との接触の機会が多く、その時間も長いので、ほとんど問題にならないだろう。しかし教育実習生の場合、比較的短い実習期間中に、できるだけ早く児童・生徒との好ましい人間関係を作りあげなければならないことを考えると、この問題は重要なものになってくると思われる。

選択した人物に対する評価 実際に選択された人物はどのようなイメージでとらえられているのだろうか。10対の項目からなる評定尺度に対する回答によって、その傾向を知ることができる。具体的に誰が選択されたかは一応問題にしないで、とにかく選択された人物に対する回答結果をまとめたものが表5である。全体的にはどの項目も平均値で3.00以上を示している。当然のことながら、自分たちが選択した人物に対してはポジティブ、あるいはより積極的な面を評価しているわけである。しかしながら、性別による違いも指摘できるようである。「近づきやすい-近づきにくい」、「大きい-小さい」、「つよい-よわい」の3項目では男子の方が女子よりも、有意に高い評価を与えている。特に、「つよい-よわい」の項目では、女子の平均値は2.75である。この数値でみる限り、女子は必ずしも「強い」教師を期待しているとはいえないようである。児童・生徒の性別を問わず、好ましい影響を与えようと努力するのは教師として当然のことである。しかしながら、望ましい教師について児童・生徒が持つイメージに男女差があるということは、充分認識しておくべき重要なポイントであろう。いいかえれば、教師のと同じ行動や態度も男女によって受け取り方が違うわけで、教師としては、その違いがどのようなものであるかを敏感に、かつ正確にとらえることが一つの能力として要求されているともいえる。

個々の人物別の評価 人物毎に分析すると、圧倒的に多くAが選択されていることはすでにみ

たところである。ところで、それぞれの人物はどのような評価を受けているのだろうか。男女をこみにしてみた場合(表6)、3人の評価に有意な差が認められるのは二つの項目である。一つは、「ていねい—あらい」で、詳細にみると人物AがB、Cの2人と比較して、より「ていねい」という評価を受けていることがわかる。もう一つは、「しずか—さわがしい」で、この場合にも、Aが他よりもより「しずか」というポジティブな評価を受けている。いずれの場合にも、BとCの間には有意な差は認められない。

これを男女別に分けてみると、さらにいくつかの相違点を指摘することができるようになる。まず男子の場合には(表7)、「おちついた—おちつきのない」、「ていねい—あらい」の2項目において、いずれもBよりAの方が相対的にポジティブな評価を受けていることがわかる。Cは数値をみろかぎりで比較的高い評価を受けているようであるが、データ数が3ときわめて少ないため明確なことはいえない。女子についてみると(表8)、3項目で人間間に有意な差があることがわかる。すなわち、「あたたかい—つめたい」、「ていねい—あらい」、「しずか—さわがしい」がそれらの項目である。「あたたかい—つめたい」の評価についていえば、Bが最も高い評価を受け、以下A、Cとつづいている。「ていねい—あらい」では、Cがきわめて低く、つまり「あらい」というイメージで受けとられている点が目をひく。「しずか—さわがしい」では、Aがより「しずか」だとポジティブに評価されている。男女別の分析結果をみて気づくことは、男子ではCが比較的高く評価されているのに対して、女子では低く評価されることが多いということである。たとえば有意差の有無を無視するというならば、女子の場合、Cは1.00台の評価を受けた項目が4個もある。これに対して、男子ではすべて3.00以上の評価で、そのうち7項目は4.00を上まわっている。これらはいずれも自分が選択した人物に対する評価である。人物Cを選んだ女子はCに対してそれほど高い評価を与えていないことになるが、それはどうしてであろうか。この点については、今回得られたデータだけでは明確な結論をひき出すことはできない。ただ、それらの数値のみから仮説をもうけることができるのであれば、以下の点は今後検討してみるに値する課題であろう。

まず男子についていえば、一般的には本実験のような評定尺度を用いた場合には、自分が望む教師に対して高い評価を与える傾向がある。ただし、あるタイプの人物(本実験の例ではB)については、「近づきやすい」、「あたたかい」、「やさしい」といった点で高く評価されることが選択の理由になる。逆にいえば、「おちつき」、「ていねいさ」、「しずかさ」などはそれほど問題にならない。

女子の場合には、男子におけるBのような傾向がさらに強くあらわれる。つまり、すべての面でポジティブであるから特定の人物を選択するのではなく、ある特性が高く評価できればそれでよしとする傾向である。もちろん、女子のCに対する評価についてはそのことすら充分に説得力のある理由にはなりえない。なぜなら、ほとんどの項目で評価が低いからである。準備した項目そのものが、人物選択の根拠となるようなものではなかったのかもしれない。さらに今後の分析が必要であろう。

いずれにしても、同じ人物に対する評価も男女による違いがあること、また同性であっても、相手によっては評価の観点に違いがあることなどが明らかになった。

選択の理由 最後に選択の理由を検討してみよう(表9)。1人が複数の理由をあげていることもあるため、合計数は被験者数を上まわっている。全体で69名であるから、多くあげられた理由としては、「③顔がおもしろい」までが妥当であろう(11名で全体の約16%にあたる)。これらはいずれも情緒的なものである。その他にも情緒的な項目が比較的多くあがっている。現職の教師の場合にも同じような結果が得られるとは考えられないが、対象が実習生という条件では、「やさ

しい」、「おもしろい」人物が望まれているといえそうである。

以上、児童・生徒が期待する教師(さしあたっては実習生)の特性を明らかにするために実験を行い、その結果の分析を進めてきた。今後、さらに男女差や選択される人物の違いなどについてより詳細な分析を行ってゆくことが必要である。また被験者を中学生にまで拡大してゆくことも考えなければならないであろう。さらに、本実験のように単なる写真のみによる刺激では、現実の問題を充分に取り扱うことはできない。どのような行動をとる教師が児童・生徒から期待されているのかといった現実的な問題、ひいては教師のリーダーシップの問題などにも注目してゆかねばならない。

謝辞 本実験の実施にあたっては、熊本大学教育学部附属小学校教諭万谷雄一氏、白石幸春氏から多大な御協力を得た。さらに熊本大学教育学部学生田淵明彦、吉本直幸、吉永公紀の諸君には、刺激人物として重要な役割を担っていただいた。記してこれらの方々に感謝の意を表す。

文 献

瀬谷正敏 1977a. 対人関係の心理。培風館。

瀬谷正敏 1977b. 印象形成。水原泰介編：講座社会心理学，第1巻，東京大学出版会。pp. 21-38。

(1983年5月23日 受理)